

京友禅・京小紋

【産地組合】京友禅協同組合連合会

（産地紹介）

染色技法は8世紀から伝わり、手描友禅は江戸時代に京都の絵師宮崎友禅斎によって確立されたと伝えられています。扇絵師として人気の高かった宮崎友禅斎が、自分の画風をデザインに取り入れ、模様染めの分野に生かしたことで「友禅染め」が生まれました。色数が多く絵画調の模様を着物に染める友禅染は、町人文化の栄えた江戸時代の中期に盛んに行われるようになりました。明治時代には、型紙によって友禅模様を染める「写し友禅染め」が開発されました。

京小紋の始まりは、基本となる型紙が作られた1200年前に遡ります。室町時代に起きた応仁の乱の後、様々な絹織物が生産されると辻ヶ花染や茶屋染が発達し、京都の堀川を中心として染色の職人町が出来ました。上杉謙信の紋付小紋帷子（もんつきこもんかたびら）や徳川家康の小花紋小紋染胸服（こばなもんこもんぞめどうふく）等は、小紋の技法を駆使して作られています。この頃に、防染糊を置いたあと引染めする小紋の技術が完成されました。

花鳥山水等を写した京友禅は、日本の着物の代名詞になっているといっても言い過ぎではないでしょう。多くの色を使いながらも、気高く奥ゆかしい京友禅の色柄には、京都千年の歴史が育んだ、美しい感覚が息づいています。

小紋は、武士の袴（かみしも）にあるような小さな文様を、一色で型染したものです。現代では、昔ながらの文字通り小さな文様で型染された小紋はもちろん、洋花等を思いきり大胆に図案化したものまで色々なものがあります。

（トピック）

- ・ 2005年11月15日に「京友禅証紙」の貼付を始めました。海外や他産地での染め加工品と差別化を図り、ブランドの確立を目指しています。

